



→暑さのあまり、のんびりと櫓を漕ぐより、すみやかに渡って欲しいという客が多く、舟はエンジンで進む。真夏の矢切の渡しは、風情がない。



↑写真右は小枝をセミの這い出した穴に突っ込んだところ。左はその長さ。ゆうに10Cmlはある。

地面を見おろし、男がぶつくさいいながら歩きまわっていた。

矢切の渡しには、ちよつとした広場があり、樹齢五十年ちかいヤナギの大木やクルミの木がある。

東京側から渡ってきた人たちは、この木陰にはいってホツとひと息つく。そんななかで、ひとりつぶやきながら歩きまわる男は、なんとセミが這い出した穴を見てまわっていたのだ。

「おかしいなあ、おかしいなあ」

こちらに近づいてくるにつれ、しだいにつぶやきが言葉になってきた。

「なにがおかしいの？」

声をかけてみた。

「穴がきれいすぎる。だいいち、掘った土がないじゃないですか」

いわれて見ると、堀取ったはずの土はどこにもない。きれいな穴だ。

「食べたんだろうか？」

「そりゃないよ。食べたら糞にして出すわけだから……。まさか、食べかすが出ないくらいきれいに消化してるはずがないよな」

「ないよなあ……。…」

今週のクマ

ときどきクマはロストボール氏に連れていかれ、ゴルフ場につながれてボールを買ってくれるゴルファーたちにサービスをさせられる。かわいがっているつもりかゴルファーたちはフランクフルトなどを買い与える。だからメタボは解消しない。もうすぐ食欲の秋。



↑甘い物が少なかった時代、子どもたちはこうしたイヌマキの実などを食べ、食べられるもの食べられないものを学んだ。

なおも男は歩きまわる。ときどきしゃ

がんで穴を覗く。そして首をかしげる。

かれこれ五十年も前の話だ。矢切の台

地と堤防のあいだは、見渡す限り水田。

ところどころに湿原もあった。

ところが、米では収入が少ないという

ので畑に変えることにした。そこで知恵

者が考えた。地下鉄工事で出た土を捨て

させるかわりに整地をしてもらおうと。

おかげで矢切は一大ネギの産地に変貌

した。東京の土で育てたネギを東京の市

場に出荷して暮らしてきた。

「もし、セミが地下鉄のトンネルを掘っ

たら矢切ネギはなかったことになるな」

若舟頭がおもしろいこといった。

それまで歩きまわっていた男が、はた

と足を止めた。

「そうなんだ。そうだよ」

嬉しそうに叫んだ。

セミの幼虫が地上に這い出してくるメ

カニズムを解明すれば、ひよつとしたら

ノーベル賞が取れるかもしれない。

トンネル掘り名人のモグラだってこう

きれいに穴は掘れない。様々なマシーン

を駆使して穴を掘る人間だって、残土捨

て場に苦勞しているわけだから、たしか

にノーベル賞ものかもしれない。